

所見より新生児特発性十二指腸穿孔と思われるが、未熟児での呼吸管理のストレス、血流障害、消化管内圧、薬剤など多因子が関与した十二指腸潰瘍穿孔と考えられ、新生児同疾患の特徴や治療について検討した。

10 食道癌放射線化学療法後に発生した食道気管支瘻に対するダブルステントの1例

保坂 靖子・青木 正・白石 修一
橋本 毅久・土田 正則・林 純一
中川 悟*

新潟大学大学院呼吸循環外科
同 消化器・一般外科*

症例は51歳男性。食道癌に対する化学放射線治療後に食道気管支ろうを発症した。経管栄養により管理されていたが、誤嚥性肺炎を繰り返すためステント治療目的に当科に転院した。気管支からのステントだけでは、食道からの逆流を防げないと判断し、食道および気管支に一期的にステントを挿入した。挿入後、咳嗽や呼吸困難と言った症状は改善し、経口摂取も可能となった。ステント挿入後、約2ヶ月で自宅にて咯血死した。

11 急性下肢動脈閉塞症を呈した遺残坐骨動脈瘤の1例

小川 勇一・葛 仁猛・桑原 淳
青木 賢治・杉本 努・山本 和男
吉井 新平・春谷 重孝

立川総合病院心臓血管外科

坐骨動脈は胎児期下肢主要血管であるが、稀に遺残し動脈瘤や血栓形成の原因となる。今回我々は急性下肢動脈閉塞症を呈した遺残坐骨動脈瘤の1例を報告する。

症例は72歳の女性、下肢痛 平成17年1月25日左下肢蒼白に気づき、1月26日には左下肢痛出現、1月27日当科受診。急性下肢動脈閉塞症疑いで緊急入院。同日緊急MRA施行し、当初大腿動脈瘤による下肢動脈の急性閉塞にて血栓除去、動注カテ留置及び下肢筋膜減張切開術施行した。

【まとめ】急性下肢動脈閉塞を契機に遺残坐骨動脈瘤が発見された稀な症例を経験した。血栓閉塞の原因は明確ではないが、遺残坐骨動脈の流速は遅いとの指摘もあり、更に瘤形成しているため、今回の血栓形成の原因に遺残坐骨動脈瘤が関与していた可能性は否定できない。根治的治療法を考えさせる1例であった。

12 比較的まれな一時ペーシングワイヤーによる右室穿孔の1治験例

竹久保 賢・上原 彰史・中山 健司
浅見 冬樹・島田 晃治・大関 一

県立新発田病院心臓血管外科・
呼吸器外科

症例は91歳、女性。完全房室ブロックのため一時ペーシングを施行。翌日にペーシング不良となり位置変更を行ったところ心タンポナーデ出現し、ショック状態となり当院搬入。同日、緊急手術施行。ペーシングワイヤーによる右室穿孔を認め、縫合止血を行った。一時ペーシングワイヤーによる右室穿孔は比較的稀であり、報告する。

13 頸動脈エコーのMax-IMTによる術前リスク診断

榛沢 和彦・名村 理・曾川 正和
林 純一

新潟大学第二外科

医療に関して社会的関心が高まっているが、術後合併症と医療ミスとを混同されている場合も少なくない。万が一に合併症が起きたとき、低い確率だとしても術前にその可能性を具体的に説明しておいた場合としなかった場合とでは患者本人や家族の受け入れは全く異なる。頸動脈中内膜複合体厚(IMT)の平均値はこれまでも動脈硬化の指標として使用され、欧米では冠動脈疾患と関連することが報告されていたが日本での報告は少なかった。しかし日本でDM患者におけるプラーク病変を含んだIMTの最大厚(Max-IMT)を測定して比較した検討によりIMTよりもMax-IMT